
古代アメリカ学会会報

第43号



セリートのピラミッド ©南 智博

目次

| | | | |
|------------|----|-------------|----|
| ◆会員からの寄稿 | 1 | ◆事務局からのお知らせ | 22 |
| ◆研究懇談会の報告 | 11 | ◆編集後記 | 23 |
| ◆学会協力事業の報告 | 16 | | |

2018年10月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

●「ワリ遺跡発掘調査プロジェクト・速報

～2017年フィールドシーズンを終えて～

西沢秀行（山梨学院大学国際リベラルアーツ学部）

はじめに

インカ帝国の成立（1476年頃に最後の強敵、北海岸チムー王国を征服）を遡ることおよそ900年、ペルー中央高地南部のアヤクチョ盆地を中心に広大な国家が誕生した（表1・図1）。このアンデス世界初となる古代国家は「ワリ」として、近年一般の人びとのあいだでも知られるようになっていく。ワリ国家はその最盛期に、北のカハマルカ盆地から南のクスコ盆地にかけての山岳部および北のランバイエケ谷から南のモケグア谷にかけての海岸部に勢力を伸ばした。そして、同時期に現在のボリビアを中心に勃興したティワナクと並んで、のちのインカ帝国成立に大きな影響を及ぼしたことが、多くのアンデス考古学者たちによって指摘されている。

| 年代 | 時期（文化名） |
|----------------|--------------|
| | 植民地時代 |
| 1533 | |
| | 後期ホライズン（インカ） |
| 1476 | |
| | 後期中間期 |
| 1000 | |
| 900 | 4期 |
| 800 | 3期 |
| 750 | 2B期 |
| 700 | 2A期 |
| 650 | 1B期 |
| | 1A期 |
| 550/600 紀元後 | |
| | 後期中間期（ワルン） |
| 紀元前 200 | |
| | 前期ホライズン |
| ～1000 | |
| | 草創期 |
| 1800/1500 | |
| ～6000 | 先土器時代 |

表1 本稿に関するアヤクチョ地方の編年（González Carré 1966; Lumbreras 1959, 1960; Menzel 1964, 1968, 1977; Ochatoma 1985; Rowe 1962 を参照して著者作成）

古代都市ワリ考古学プロジェクト

今回、私は縁あってワリ国家の中心地、そして実

際に当時の都であったと考えられている「ワリ遺跡」で実施されることになった考古学プロジェクトに一員として参加させていただく機会を得た。このプロジェクトは、米国ニューヨーク州立ビンガムトン大学のウィリアム・イスベル教授（Prof. William Isbell, Binghamton University-The State University of New York）をディレクターに、メリーランド州モントゴメリー大学のバーバラ・ウルフ教授（Prof. Barbara Wolff, Montgomery College）および地元アヤクチョの国立サン・クリストバル・ワマンガ大学のイスマエル・ペレス・カルデロン教授（Prof. Ismael Pérez Cardelón, Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga）を共同ディレクターにして行われているものである（注1）。なお本稿では、私たちが発掘調査を行っている遺跡を「ワリ遺跡」、当時の都市を指す際には「古代都市ワリ」、そしてこの都市を首都として成立した国家を「ワリ国家」と呼称する。



図1 ワリ遺跡の位置（著者作成）

本プロジェクトは3年にわたる計画のもと、2017年（5月下旬～8月中旬）と2018年（同じく5月下旬～8月中旬を予定）の2シーズンにかけて発掘と出土物の整理・目録作成作業を行い、最終年となる

2019年には、それらの出土物、とりわけ土器類について詳細な分析を行う予定となっている。本稿では紙面の制約もあり、2017年度のフィールドシーズンで私が関与した発掘区画・出土物の概略を記述するにとどめたい。2017年度プロジェクトの成果については、2018年4月にワシントンDCで開催された第83回アメリカ考古学協会年次総会（Society for American Archaeology 83rd Annual Meeting）のなかのシンポジウム「中間報告：古代都市ワリ考古学プロジェクト・2017年フィールドシーズン（Preliminary Results: 2017 Field Season, Programa Arqueológico Prehistoria Urbana de Huari）」で、プロジェクトの参加メンバーが各自発表を行っている（注2）。

本プロジェクトの目的

本プロジェクトの実施にあたって、ディレクター・共同ディレクターにより掲げられた研究上の目的は以下のとおりである。

(1) ワリ国家の都であったワリ遺跡では、これまで規模の大きな儀式・祭祀用建造物に偏った発掘調査が進められてきた。そのため、一般庶民が居住していたとみられる空間については、ほとんど調査の手がつけられてこなかった。そこで、本プロジェクトでは一般庶民の居住空間を見つけ出し、そこに焦点を当てた「ハウスホールド考古学（household archaeology）」を実践することで、これまで抱かれてきたワリ遺跡についての解釈（儀式的・祭祀的性格が強い古代都市）が妥当なものであったのか検証することを目指す。

(2) 世界各地の古代都市をめぐる従来の学説によると、そこにはいくつかの共通した特徴が見られる。たとえば、民族的にも社会経済的にも多様な人びとが集まっていたこと、住民の多くが食料生産から解放されて他の経済活動に従事していたこと、さらには経済学でいう「規模の経済性（economies of scale）」を発揮する職業の専門化が進み、その結果、多様な生産物の取引を行う市場が発達していたことなどである。ところが上述したような経緯もあり、ワリ遺跡ではこれまでに人口構造的・社会経済的な多様性を示す証拠が見つかっていない。そこで、本プロジェクトでは発掘調査の対象を一般庶民の居住空間へと広げることによって、古代都市ワリにも他の古代都市と似た住民間の多様性・異質性が存在していたのか検証することを目指す。

出土した遺構

以上のような方針のもと、2017年度の発掘では、できるだけ多くの建築物を見つけ出すことが優先された。そこで石壁が見つかるたびに、それらに沿ってトレンチングを行うという発掘手法がとられた。結果として、大小さまざまな石壁やそれらに囲まれたいくつかの部屋状構造物を見つけ出すことに成功した（図2）。これらの石壁は、すでに知られているワリ時代の多くの遺跡と同じく、大きさの似た岩と岩を泥で固めながら注意深く積み上げる方法により築かれたものである。なかでも私が発掘を担当した区画では、厚さが1m近く、床面からの高さが2m以上にも達する巨大な石壁が出土した。

ほかにも付近の区画からは、「ニッチ」を設けた部屋状の構造物が検出されたが、そうしたニッチからは多彩色のモチーフで装飾された土器片が多数見つかった。さらには、いくつかの部屋状構造物の室内からは、「ディアトミタ（diatomite）」とよばれる珪藻土の堆積岩を細かく砕いて敷き詰めた床面が3~4層に重なり合って見つかるケースもあった。こうした発見は、当時の建築技術および空間利用（そして再利用）のサイクルを知るうえで貴重な資料を提供してくれよう。



図2 ワリ遺跡発掘区域の一部、北東側を望む
（埋め戻し作業の開始時に著者撮影）

出土した遺物

出土した遺物を種類別に見ると、土器片が圧倒的に多かった。実際、発掘の行われたすべての区画、そして発見されたすべての部屋状構造物から土器片が出土した。現在、土器片の整理・目録作成作業は、サン・クリストバル・ワマンガ大学の仮設研究室で進められている。ただ、私がアヤクチョ滞在中に行った土器の簡易分析では、アヤクチョ地方の前期中

間期（ワルパ文化）および中期ホライズン（ワリ文化）に同定しうる、実質的にすべての土器様式を確認することができた。さらには、これまで研究が手薄であった前期中間期末の「クルス・パタ様式」および中期ホライズン初頭の「チャキパンパ A 様式」の土器片を相当数含む区画が存在していることも明らかとなった。したがって、これらの土器資料およびそこに付随した遺構・遺物の研究から、この地域でワルパ社会からワリ社会への移行がどのように進んだのかアプローチできるとの見通しを得た。またこの移行期に、人びとの経済活動がどのように変化したのか解明することも可能となろう。

動物骨については、そのほぼすべてが細かな破片に砕けてはいたものの、発掘した区画のすべてから数百という単位で出土した。目録作成作業時に一定程度の大きさを保持し、その動物の種類と体の部位が判別できるものについて大雑把に分類したところ、アンデス地帯特有のラクダ科動物の下顎・脚・指の骨や、クイとみられる齧歯類の頭骨などを確認することができた。そのほか、陸地生息の貝類の殻で作られたビーズや、スポンディラス貝 (Spondylus shell) の殻を加工して作られた装飾品も少数ながら存在していた。

土器片や動物骨にくらべると、数量では遠く及ばないものの、さまざまな材質の石から作られた石鏃や石片状の道具も多く、区画から出土した。さらには 40 点ほどではあったが、銅製のトゥープ（服飾用の留めピン）や装飾品の一部または破片とみられる小型の金属製遺物も確認された。

残念ながら、2017 年度の発掘調査では埋葬遺構が一切検出されなかったが、保存状態の良い 20~30 本ほどのヒトの歯にくわえて、ほぼ完全な形のヒトの下顎および脚の骨もわずかながら回収できたので、今後、専門家による DNA 分析やアイソトープ分析の結果を待ちたい。そうした分析により、これらの人物が地元アヤクチョ出身であったのか、それとも遠く離れた地方（たとえば海岸部）からやって来たのかといったことが明らかになるはずである。また、そうした人物が亡くなる前の数年のあいだに、何を食料としていたのかなども知ることでできよう。

おわりに

2017 年度のフィールドシーズンは、古代都市ワリの実像に迫る 3 年に及ぶプロジェクトの、まさに口火を切ったに過ぎない。私個人の目標としては、2018

年のフィールドシーズン開始までに、出土した土器の様式分析や確認された多様な土器様式の時系列的整理を少しでも進めることができると考えている。この会報をお読みの研究者のみなさんから、当プロジェクトについての、そして私が関与している土器分析についての有益なコメントをいただけることを願っている。みなさんからの温かいご支援を期待したい。

注)

1: このプロジェクトの実施にあたって、William Isbell 教授・Barbara Wolff 教授が米国国立科学財団 (National Science Foundation) から多大な支援を受けたことを記しておきたい。私はこの場を借りて、お二人の先生方から参加のお誘いを受けたことに心から感謝の意を表します。

2: 私もここで発表する機会をいただいた。ただ、仕事の都合上、ワシントン DC に足を運ぶことができなかったため、学会当日はプロジェクトに参加したメンバーの一人に代理発表をお願いした。

●女性研究者の課題と目指すところ ～座談会「キャリアパスとライフイベント」～

瀧上 舞 (山形大学人文社会科学部学術研究員)

(I) はじめに

古代アメリカ学会主催の座談会「キャリアパスとライフイベント」は、これまで公に発信されることが少なかった研究者の抱える家庭と研究との両立における悩みを共有し、対策や改善に向けて各会員が考える足掛かりとなることを期待して開催された。古代アメリカ学会初の試みとなった本座談会には様々な状況にある会員が参加し、2 時間半にわたる意見交換はたいへん盛り上がった。

座談会では初めに自己紹介を行い、各自の関心のある事柄などを挙げてもらった。若手研究者からは、まだ想像もできない将来のライフイベントにおいて想定される課題と、その対応策につながる情報を得たいという要望が挙げられた。そこで、ライフイベントの時系列に沿ってテーマを取りあげ、それぞれの段階で生じる問題について意見を交わす形で会を進行していった。

(II) 結婚に伴う問題

結婚というライフイベントをテーマとして挙げると、主に次の 3 点が話題に上った。すなわち (1)

戸籍名の変化に伴う問題、(2)結婚のメリット、(3)結婚のデメリットである。

(II-1) まず初めに挙げられたのは、戸籍名の変化である。旧姓を仕事上で使い続ける場合に、パスポートなどの公的書類との名前の違いや、業績の不認知などが障害となる。留学や海外出張の手続き、ビザの登録、海外での研究者登録における戸籍名と研究者名の違いの問題が参加者の経験として挙げられた。

(II-2) 次になぜ遠距離になる可能性があるのに結婚したのか、という率直な質問が提示された。そこで結婚における様々なメリットが既婚参加者から示された。例えば、人生を支えあえるパートナーの存在は安心感につながり、税金面での経済的利点もあること。さらに親族からの風当たりも和らぎ、双方の家族に生じる問題（親の病気や介護など）をシェアできるのも良い点であるとの意見もあった。

(II-3) しかし一方で、結婚において社会的デメリットも生じる。研究者に多い遠距離結婚の場合、日本の社会システムで想定されているモデル（男女が一緒に住み、適齢期に子どもを持つ）とは大きく異なっているため、税制上の不利益を被る場合もあり、補助金や助成金などで救済されないケースも多々もある。結婚は勢いだという意見もあるが、税制システムや会社・大学の規定などを事前に把握しておく方が良いだろう。

(III) 妊娠・出産に伴う問題

次のライフイベントとして、妊娠・出産をテーマに意見を交わした。主に論点として挙げたのは4つの話題で、(1)子どもを産むベストタイミングとは、(2)妊娠・出産期のフィールド活動について、(3)出産後に研究活動を再開できる時期はいつ頃か、(4)研究再開時の社会的保証についてである。

(III-1) 子どもをいつ生むのかというのは難しい問題である。研究者としての実績を積む前に妊娠・出産で研究活動が途切れると、研究活動への復帰に困難が生じる。一方で、研究の足場を固めてからの妊娠・出産を目指す、生理学的問題で希望がかなわない可能性がある。参加者の経験の一つとして、女性研究者の先輩から「可能なら博士課程のうちに子どもを産む方が良い。卒業後は年々産みにくくなる」という助言を受けたことが話された。キャリア形成を優先させて妊娠・出産を先送りにすると、年齢を重ねた時の体力の低下や仕事の増加、一時的なキャ

リア離脱の難しさ、加齢に伴う生理学的問題が生じてくる。また入院や介護、独居高齢者のケアなど、自身のライフイベントと親のライフイベントが重なる可能性もあり、経済的・時間的な環境はますます厳しくなる。若手研究者が早いうちにそれらの具体的な情報を得ていることは、ライフプランの検討において非常に重要である。

(III-2) 子どもを連れたフィールド活動や妊娠中のフィールド活動については、やはり難しいというのが経験者の意見である。言語や現地の環境に精通していても、子どもには様々なトラブルがついてまわり、自分の調査活動を十分に遂行することは不可能に近い。近年は妊娠中・出産後のフィールド活動についての提言が出されているが⁽⁴⁾、体力の個人差を考慮する必要がある。また、女性のフィールドワークを支援する活動などもあるが^(2,3)、子どもを伴うことによる調査へのフィードバックに焦点が当てられており、ポジティブな意見のみを鵜呑みにするのは危険である。妊娠中・出産後の体調や子どもの発達の経過、自身の体力、パートナーの仕事の状況や理解、子どもの性格等、すべて千差万別であり、とても計画通りに進めることは難しく、調査内容や地域、研究方法を変えるなどの柔軟な対応が必要になってくる。妊娠中・出産後に研究をどのように進めるのか、指導教官や上司、調査隊長に相談できる関係や環境の構築、また周囲の共同研究者に理解してもらうためのネットワーク作りが重要である。

(III-3) 出産後の研究活動の再開時期については、特に若手研究者からの質問として挙げられた。子どもが幼稚園に上がるまで、あるいは小学校に上がるまでは自分の時間はとても割けないというのが子育て中の女性研究者の意見であった。さらに、安定的に給与を得られる仕事に就いていないと保育園に預けることもできず、ますます研究活動に戻ることが難しくなると指摘された。産休システムがあり、復帰が可能な職場に所属していないとスムーズなキャリア復帰はなかなか難しいというのが経験者の意見であった。

(III-4) さらに、社会システムとして、女性が妊娠・出産で研究を中断する場合の制度の不足が問題であるとする意見も挙げた。日本学術振興会から支給される科学研究費補助金において、女性が研究代表者の場合は、妊娠や出産に伴い研究の一時中断と延長が可能となるが、研究分担者として女性が参加している場合の対応はなく、研究プロジェクトはその

まま進行していくことになる。3年から5年間のプロジェクトに女性が参加した場合、またプロジェクト関連のポストに就いた場合に、妊娠・出産で2年間離脱した際の弊害は大きいと多くの女性研究者が考えている。離脱時期をコントロールできないのも、プロジェクトの進行状況を大きく左右してしまいかねない。研究制度としては許容されるように設定されているが、やはり周囲へ及ぼす影響への懸念や、それに伴って受ける可能性のある周囲からの不快感を考えると、妊娠・出産へはなかなか踏み切れず、また女性の研究参加が倦厭されやすくなるのが現状である。さらに産休・育休に伴う業績生産の低下により、女性研究者は次のポスト探しや、次の研究費獲得が困難となる。このようなキャリア形成への障害が懸念され、無期雇用研究職への就職を優先させる女性研究者も多い。これらの問題への社会的対応として、妊娠・出産に伴う研究活動の中断を余儀なくされた女性研究者への助成金・補助金は年々増えてきており、日本学術振興会の特別研究員（RPDやRRA）制度や企業・財団の助成金、大学の補助金などが座談会で紹介された。

（IV）復帰に際して必要なこと

最後に、復帰に際して必要なことは何か、という問いがテーマとして出された。それに伴い次の3点が話題に挙がった。（1）所属機関の必要性和（2）学位の必要性、（3）研究大会参加の難しさである。

（IV-1）研究活動への復帰に際しては、所属研究機関へのアクセスが課題となる。前述したライフイベントによる研究中断者を対象とした助成金や補助金に応募するためには所属機関が必要となり、受入れ教官の理解も重要となる。この点においては、学生時代に休学して子どもを持つことのメリットの一つとして、復帰の際にスムーズに戻れる場所があることは重要である。

（IV-2）また一方で、助成金申請の障害として、募集要項の多くにおいて博士学位を有した女性研究者が対象となっている現実がある。古代アメリカ学会に所属する研究者の多くがそうであるように、学位取得までに多大な時間を要する研究に取り組む女性研究者への研究助成はほとんどない。多くの助成金・補助金が、比較的速やかに学位を取得できる理系の女性研究者のライフイベントをモデルとしており、多様なライフイベントとキャリアパスの在り方を考慮した助成システムは未だ不十分である。さらに、

ほぼ全ての助成金・補助金が妊娠・出産に伴う研究中断者を対象としており、妊活に伴う離職では利用できないという問題もここに併記しておきたい。様々な理由でライフイベントに伴って研究活動から一時的に離れる場合、どうやって戻る道を作るのかということ念頭においておく必要があるだろう。

（IV-3）子育て世代の研究者への質問として、学会の研究大会への参加を望むかどうかという問いがなされ、研究大会に参加したい、託児システムがあれば助かると言った意見が出された。近年の大手学術雑誌では、女性研究者の学会参加への提言がなされている^(4,5)。会員の多い学会では託児システムを提供しているケースもあり⁽⁶⁾、そのような学会での発表を通して研究活動への復帰の足掛かりとすることもできる。女性研究者はそれらを見越した研究活動（所属学会の選定や出産前のデータ収集など）を行う必要があるだろう。

（V）若手女性研究者への助言

これらのテーマについてそれぞれの認識や経験を話し合う中で、先輩研究者から若手研究者への助言も多く出された。どの意見でも共通していたのは、「今はまだ結婚や子どもを考えられなくても、いつかそうなるかもしれないと想定してライフプランやキャリアを検討した方が良いだろう」という意見である。それと並行して、データ収集や業績の積み立て、研究環境や人間関係の構築、婦人科系の健康診断など、打てる手は全て打っておく方が良いというコメントも出された。また、周囲の友人や先輩・後輩、上司に恵まれて欲しいという意見もあった。近年は女性研究者への偏見を放言する人は減ったが、やはりまだ社会システムを背景にした認識が根底に残っている部分もある。反対に、セクハラ・パワハラ・マタハラを避けるために、女性研究者の将来ビジョンにコメントをつけにくくなっている側面もあり、不必要な付度によるキャリアへの弊害も懸念される。自分がどういうキャリアプランを考えているのか、仕事継続の意思、出産後の復帰時期の希望、専任就職の希望の有無、フィールド調査の希望の有無など、自分の意思を周囲の人にしっかり示し、相談していくことが大事である。

（VI）まとめ

本座談会に参加して報告者が改めて驚いたのは、多くの女性参加者が女性であるがために被るキャリ

アへの障害や偏見を体験・認識しており、それをどのように克服するかを模索していたということである。ライフイベントに伴って様々な問題が存在する中で、それらを互いにアウトプットし、協力し合うことは、女性研究者の進出において非常に重要だと思われる。参加者の中からは、ライフイベントとキャリアパスというのは男女共通の問題であり、両性の歩み寄りで7-8割は解決するだろうという意見もでた。社会システムが変わるのには時間がかかるが、女性のキャリアパスにおいて浮上する諸問題を男性が認識し、多様な研究への関わり方が受容されていくことで、いくつかの問題への対応策がうまれていくと期待される。

またこれは今後、女性だけの問題ではなく、男性研究者のキャリアパスにも関わってくるだろう。日本社会全体で女性の社会進出が進む中、従来のように女性が家庭に専念し、男性が仕事に専念するという分担形式は難しくなっている。家事・育児に深く係る男性も増え、また高齢化社会に伴って両親の介護に男性が携わることも増えている。自身のあるいは家族のライフイベントに伴う研究の波をいかに乗り切るのかは、男性研究者・女性研究者に共通の重要な課題である。意見交換により相互の認識を深めて、より柔軟な研究体制が形成されていくことが望ましく、本座談会はその目標に向かって学会が動き出した有意義な企画であった。

(VII) 参考資料

1. Sohn, E., 2018, Child on the horizon. *Nature* 554, pp. 393-395.
2. FENICS (<http://www.fenics.jp/>)
3. Pregnant in the field: have trowel, will travel (<https://www.theguardian.com/lifeandstyle/2017/jul/01/pregnant-in-the-field-blog-photography-have-trowel-will-travel>)
4. Calisi and a Working Group of Mothers in Science, 2018. How to tackle the childcare-conference conundrum. *PNAS* 115(12), pp. 2845-2849.
5. Calisi, 2008. Got milk, must conference. *Science* 359, p. 838.
6. 白井千晶, 2008. 学会託児の現状 (http://shirai.life.coocan.jp/html/39_shirai.pdf)

● 「トラランカレカ発掘体験記」

南 智博 (同志社大学文化情報学部)

2017年8月から1年間、私は同志社大学から交換留学生として、メキシコのラス・アメリカス・プエブラ大学(UDLAP)に留学した。留学生活の最後に、UDLAPの人類学科で教鞭をとられている嘉幡茂先生のご厚意により「トラランカレカ考古学プロジェクト」に参加する機会を得た。そこでの3週間にわたる、貴重な体験について述べたいと思う。

私の通う同志社大学文化情報学部では、人間の活動すべてを「文化」と定義し、それを統計学および数学的手法を用いて解析している。IT技術の革新が著しい現代社会だが、私は情報学を勉強するにつれ、人間としての原点や在り方を改めて考えるようになった。そして人間そのものを研究対象とする人類学、中でもその一分野である考古学を学びたいと考えた。私は幼少期からインカ文明やマヤ文明に興味を抱いていたので、アメリカ大陸の考古学を「文化事象」として解析、研究したいと思った。そこで人類学的な考古学を基礎から学べる、本学の交換留学の提携校のUDLAPに留学した。

留学してまず大変だったのは、スペイン語で授業を受けることだった。私は留学前に大学でスペイン語を学んでいたし、留学の前年に1か月ほどUDLAPの夏期短期プログラムに参加し、スペイン語力の向上に努力してきたつもりだった。しかし、外国で初めて本格的な授業を受けてみると言語の壁はとて大きく、想像以上に大変なものであった。特に最初は、毎回の授業で課される課題を読むのに一苦労だった。考古学の授業では専門用語が多く用いられる授業で行われる議論も理解できないことが多々あった。しかし周りの留学生たちの助けや、何よりも嘉幡先生のような助言、メキシコ人の学友からの協力のお陰で、なんとか授業にもついていけるようになり、考古学調査へ参加するために必要な「考古学実習」の授業単位を取得できた。

そして春学期(1月から5月)が終わり、あとは発掘調査の開始を待つだけとなったのだが、直ぐには「トラランカレカ考古学プロジェクト」は開始されなかった。当初の予定では、調査は早ければ6月の第三週目から開始されると言われていたが、6月に入ってもなかなか嘉幡先生からメールは送られてこず、本当に調査に行けるのかと一時は不安になった。

結局、今年はメキシコ考古学審議会が発行する発掘調査の許可が遅く、7月初旬になってようやく許可が下りた。最終的に約2か月の間、調査の開始を待たされることになった。その間には、発掘調査の実施に至るまでに、各関連機関との交渉や書類発行の手続き、自治体の要人との折衝と地権者から調査を行う理解を得ること、さらには調査に参加する研究者との役割分担の会議といった様々な準備が必要であったということを後に嘉幡先生から伺った。このようなことは現場に関わらなければ分からないことであり、自分にとって良い勉強になった。

一方、この2か月間で様々なメキシコの遺跡を巡ることができた。メキシコの学生証は、休み期間にバス代などで大幅な学割が効くだけでなく、ほとんどの博物館、遺跡公園の入場料が無料になるため、学生はありがたい恩恵を受けることができる。プロジェクト開始までの待機期間は長かったものの、結果として楽しく有意義な時間を過ごすことができた。

調査許可が下りる前のある晩、嘉幡先生から晩御飯のお誘いを頂いた。そこでプロジェクトの共同団長であるテュレーン大学の村上達也先生と、メキシコ国立自治大学（UNAM）の博士課程で考古化学を専攻されているフリエタ・ロペスさんを紹介いただいた。皆さんから聞く様々な話は大変興味深く、私は楽しいひとときを過ごすことができた。

7月に入っていざ調査許可が出ると、嘉幡先生は、授業の一環でプロジェクトに参加するメキシコ人学生のダニエル・ピネダ君を紹介してくださった。そして、彼と共にトラランカレカ村の研究所に来よう指示された。私はこの村の近郊にあるサン・マルティン市までは行ったことがあり、一人でも研究所まで問題なくたどり着けるとお伝えした。しかし嘉幡先生は、最初はメキシコ人と行動するように、と意外なことをおっしゃった。なぜなら、トラランカレカ村周辺の治安は悪化しており、村人にとって見ず知らずの外国人が一人で出歩くことは、彼らに警戒心を与えることになるからである。それまで何度か一人でメキシコ国内を自由に旅行し、この国の生活に慣れきっていた自分が、改めて外国人であることを自覚した瞬間であった。

トラランカレカ村に着くと、ダニエル君は村を案内してくれた。研究所は、この村の中心地（写真1）から徒歩5分程度のところにあり、周囲には小さな雑貨屋や飲食店（写真2）がいくつもあったため、生

活するには問題はなかった。村自体はこじんまりとしていて、のどかな印象だったことを憶えている。



写真1 中心地 ソカロ（筆者撮影 2018年7月8日）



写真2 道には飲食店が立ち並び
(筆者撮影 2018年7月8日)

研究所に入ったものの、予定していた調査開始日（7月8日）の仕事は、作業員さんや機材を運ぶトラックを確保することができずに休みとなった。どんなプロジェクトでも予想外なトラブルに見舞われることはありうるので、それも計画の段階で考慮すべきだとつくづく思った。

翌日はトラックを確保でき、私は晴れて調査に参加することになった。最初の1週間はトラックの台数が少なかったため、荷台に乗って研究所と現場を移動した。トラックの荷台に乗ることは、人生で初めての経験だった。夏とはいえ標高2,000メートルを超える場所でのトラックの荷台はととても寒かった。

第1日目は調査用のトレンチをトータルステーションで設置すること（写真3）で作業が終わった。朝が寒かった一方、昼は日本の夏ほど気温が上がらず

湿度も低いので、現場の気候は想定していたよりも過ごしやすかった。

その後、すぐに嘉幡先生はスペインで行われる学会に行かれたので、村上先生が一人で現場の指揮をなさっていた。村上先生は知り合ったばかりの私に、作業手順や道具の使い方などを丁寧にご指導してくださいました。人生で初めての発掘作業に私はこれから自分が体験することをすべて吸収して、できることを精一杯やろうと意気込んでいた。



写真3 トータルステーションを利用してトレンチを設定する作業風景 (筆者撮影、2018年7月10日)

しかし、そんなやる気も直ぐにくじかれることになった。私は中学・高校時代にラグビーをしていたので、体力には自信があった。ところがピッケルやスコップでトレンチを掘る、バケツを運ぶ、そして篩にかけて出土品を見つけ出すという一連の作業は予想以上にきつい作業で、標高の高さもあり、すぐに息を切らしてしまった。途中で休憩時間もあったが、横になって休まなければ身体がもたなかった。作業でぐっぐくに疲れ、研究所へ帰ると直ぐに身体を休ませたかったが、作業日誌は毎日書いて提出しなければならなかった。

また、私の発掘作業のスピードは他の学生や作業員さんよりも遅く、授業で何度も扱ったトータルステーションの設置も上手にできなかったため、私は自信を失っていった。だが、日が経つにつれて作業の流れがわかるようになり、次に何をすべきか予想できるようになった。そうするとおのずと作業効率もあがり、断面図も描かせてもらえるようになり(写真4,5)、少しでも役に立っていることが実感できてとてもうれしかった。また、調査の進展に伴って古代の建造物(写真6)が徐々に明らかになっていく様子にも魅了されていった。



写真4 断面図を実測している場面 (筆者撮影、2018年7月31日)

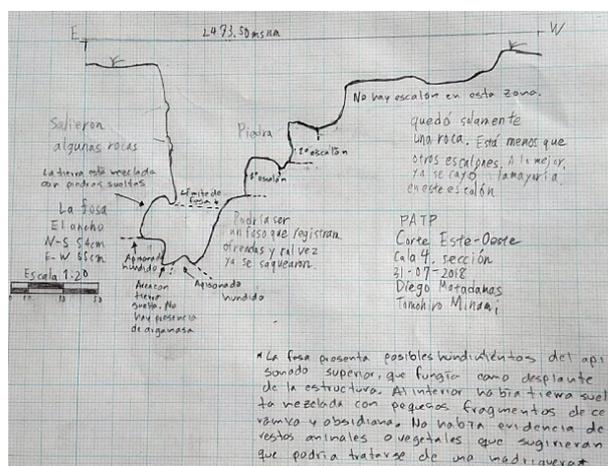


写真5 初めて実測した断面図と観察事項 (筆者撮影、2018年7月31日)



写真6 トレンチ4に出てきたプラットフォーム
(嘉幡茂提供、2018年8月15日)

調査開始から2週間が経ったころ、嘉幡先生が出張先のスペインから帰墨された。ある日、私は先生に連れられて、遺跡の南側にある雨の神の石彫（写真7）を探しに出かけた。この石彫は4年前に調査団が苦労して発見し、GPSでUTM座標を記録していたのだが、再び発見するまで1時間以上かかった。この地域の植物の成長スピードが早く、石彫が草木に覆われてしまっていたからだ。しかし、発見できた時の達成感は大きく、石に刻まれた図像を見た瞬間に、私は古代人の息吹を肌で感じ、あたかも彼らと時間を共有しているような気分を味わった。



写真7 雨の神を描いたと考えられる石彫
(筆者撮影、2018年7月24日)

7月28日には、調査参加者全員で発掘現場においてバーベキューをおこなった（写真8）。自分たちは外国人であるため、より一層地域住民や作業員たちと強力な信頼関係を築くように努力すべきだと嘉幡先生はおっしゃった。一見仕事の打ち上げのようなものに見えたバーベキューも、大切なプロジェクトの一環であることを知った。



写真8 バーベキューの様子
(筆者撮影、2018年7月28日)



写真9 様々な人と話すことができた
(筆者撮影、2018年7月28日)

このようにして3週間があっという間に過ぎ、ようやく現場での生活に慣れたころには、日本への帰国日が近づいていた。帰国の準備を進めながら、1年間の留学中に起こった出来事や、発掘現場での体験が走馬灯のように頭の中を巡り、私はもっとメキシコに残りたい気持ちになった。調査の最終日まで残れなかったことが残念だったが、これまでお世話になった人々に感謝と別れを告げ、トラランカレカを後にした。

今回の発掘調査は、自分にとって何もかもが初めての体験で、全てが勉強になった。特に強く感じたのは、発掘は一人一人が担当する仕事もちろん大切であるが、チーム全体で協力し合いながらでない

と成り立たないということである。それ故に団長を務める教員とその学生のみならず、現地採用の作業員さんたち、そして村人などプロジェクトに関わる全ての人との信頼関係を築くことがとても大切になってくる。私自身も現場の人たちと仕事上必要な会話だけでなく、休憩時間も積極的に関わって信頼を得ようと努めた。その甲斐あってか、皆さんがやさしく接してくれ、作業のコツを知ることができ、作業効率が上がった。そして、それに伴い調査に対する理解も深まった。

一方、自分の新たな課題もたくさん見つかった。まず土の色や細かさの変化から見る正確な地層の境目の判定や構造物の建造から埋没までのプロセスについての正確な解釈が一番の課題である。改めて基本から考古学の研究手法について学習しなければならないと思った。出土品の正確な分類、調査結果の纏め上げ方なども課題として挙げられ、様々な学術報告書を読んでいくことも必要性も感じた。また、機会があれば考古学調査に参加し、経験を積み、技能を培い、いつかは自分が考古学プロジェクトを立ち上げられるよう、今後も日々の努力を重ねていきたい。



写真 10 最終日現場にて他の作業員さんたちと
(筆者撮影、2018年8月1日)

●第6回西日本部会研究懇談会

『最新技術を駆使したピラミッド研究の現在』

第6回西日本部会研究懇談会は、平成29年11月26日(日)、名古屋大学文学部棟127号室にて開催された。参加者は35名であった。

「最新技術を駆使したピラミッド研究の現在」と題した今回の研究懇談会では、エジプトのピラミッド研究の若手研究者2名をお招きし、3D計測やミュオンといった現在注目されている最先端技術によるピラミッド研究の現在についてご発表いただいた。

発表の一人目は河江肖剰氏(名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター研究員)で、題目は「エジプト・ピラミッド研究にける3D計測の変遷と展望」であった。エジプトのピラミッド建設方法については諸説があるが未だよくわかっていない。河江氏は、その原因を精密な計測データの欠如に由来すると指摘する。そこで河江氏は、学際的研究チームを組織し、発展著しい3D計測技術を駆使して、ピラミッド建設方法の実証的な解明を試みている。本発表では、調査方法の在り方から、最新データ、そして今後の展望などについて報告がなされた。

二人目は、森島邦博氏(名古屋大学高等研究院特任助教)で、題目は「宇宙線イメージングによるエジプトのピラミッド調査とその技術的展望」であった。ギザにあるクフ王のピラミッドを含む4つのピラミッドを対象とした宇宙船イメージングプロジェクトScanPyramidsの調査成果についての報告であった。森島氏らのチームは、宇宙線に含まれるミュオンを用いた非破壊イメージング技術の導入によってクフ王のピラミッド内部に未知の空間が存在することを確認し話題となっており、その成果の一部が発表された。

コメンテーターとして、河江氏の発表には宮野元太郎会員(大阪観光大学)、森島氏の発表には中村誠一会員(金沢大学)をお招きした。事前に両コメンテーターには、古代アメリカの建造物研究にどのように活かせるか、という観点からコメントを依頼していた。したがって、とりわけ応用に向けた技術的観点から様々な質問がなされた。これらの質問に対して発表者からは適切な回答があり、今後様々な計測技術の導入を検討している参加者にとっては有

益な情報が得られたのではないかとと思われる。

今回の研究懇談会は、次の2点において、新たな試みであった。第一に、非会員かつ古代アメリカを専門としない2名を発表者とし、会員2名をコメンテーターとした点である。ピラミッドを共通テーマとして学会・地域を超えた新たな学术交流・知識獲得の場にしたいという意図があった。コメンテーターのお二人には専門外のテーマであるにもかかわらず、適切なコメントや質問をいただいた。そのかいもあって、発表者と会員の間で新たな共同研究が立ち上がりようとしている。

第二に、古代アメリカに関する内容というよりも考古学全般に共通する調査技術をテーマにした点である。近年では、LiDARやDrone、3Dモデル生成技術が考古学研究に導入され、さまざまな革新的成果が得られている。河江氏が指摘していたように精密な3D計測技術は、文化遺産とりわけピラミッドなどの建築遺産の記録・保護という観点からも重要である。また河江氏らのチームは大容量の建築データをどのように一般公開するかという点についても配慮しており、パブリック考古学あるいはオープンサイエンスという観点からも学ぶべき点が多かったと思われる。

名古屋で初開催となった今回の研究懇談会は、参加者が集まるかどうか不安があった。エジプトをテーマにしたこともあり、非会員の参加が多かった点は企画者として嬉しい反面、会員の参加を促すにはどうすべきかを考えるきっかけとなった。参加者にとって魅力ある研究懇談会とするべく、今後も新たな企画を考えていきたい。

(西日本部会幹事：市川 彰)



●第7回東日本部会研究懇談会

『トラランカレカ考古学プロジェクトの成果と挑戦』

第7回東日本部会研究懇談会は、平成29年12月17日(日)、専修大学神田キャンパス5号館4階542教室にて開催された。年末の忙しい時期にもかかわらず会員16名と非会員9名、計25名の参加があった。

今回の研究懇談会では、「メキシコ中央部の後古典期」と題して、メキシコ中央高原の都市形成、発展、衰退のプロセスといった問題に取り組む考古学調査団の成果と課題について、考古理化学やパブリック考古学研究を加えた総合的な取り組みについて発表いただいた。第1回西日本部会研究懇談会以来ひさしぶりの三本の報告となった。

最初の発表は村上達也会員(テュレーン大学)、嘉幡茂会員(ラス・アメリカス・プエブラ大学)、フリエタ・M.=ロペス・J.(メキシコ国立自治大学)、福原弘識会員(埼玉大学)、荒木昂大会員(東北大学)による「トラランカレカ考古学プロジェクトの調査目的と成果(2012-2017)」であった。発表ではトラランカレカ遺跡考古学調査の概要と都市化の過程が報告され、社会の差異化を多様な集団が「想像の共同体」を創り上げる統合化のプロセスとして総合的に理解する必要性と、大地域(Macroregion)の一つとしてメキシコ中央高原全体を捉えることの重要性が指摘された。

次の発表はフリエタ・M.=ロペス・J.(メキシコ国立自治大学)で「Aplicación de las técnicas arqueométricas en los estudios arqueológicos de Tlalancaleca: Caracterización de los materiales constructivos」であった。発表は考古理化学的手法を用いた土製建築材の分析方法の紹介と結果報告、考古理化学の有効性に関する発表がスペイン語でおこなわれた。

最後の発表は嘉幡茂会員、小林貴徳会員(関西外国語大学)、フリエタ・M.=ロペス・J.で「トラランカレカにおけるパブリック考古学の実践: 地域住人のアイデンティティと持続可能な考古学調査を求めて」であった。発表では、外国人考古学者が海外調査をおこなう上での困難さや問題点、またメキシコ考古学が抱える問題点が整理され、考古学研究を地域と共有するための情報発信ツールとして作成したマンガの紹介が行われた。

コメンテーターとして村上会員の発表に加藤泰建会員(埼玉大学)、ロペス氏の発表に井口欣也会員

(埼玉大学)、嘉幡会員の発表にサウセド・セガミ・ダニエル会員(立命館大学)をお招きした。アンデスをフィールドとする三名からのコメントによって議論は大いに盛り上がり、また会場参加者からも多くの質問がなされた。懇親会場でも議論が続き、会は盛況であった。

今回の研究懇談会は、複数人の本学会員が関わる一つの考古学プロジェクトを総合的に報告する試みであり、海外に研究拠点を置く会員の帰国に合わせた開催となった。また昨年を引き続き、非会員研究者の発表を含むことで、意見交換がなかなか容易でない会員間や、非会員との新たな交流・懇談の場となったと思う。

研究懇談会の発表者として、村上会員と嘉幡会員には二度目の登板を願った形になったが、研究大会に参加が難しい海外在住の会員には、研究成果の発表の場として研究懇談会を積極的に活用願いたい。

(東日本部会幹事: 福原 弘識)



●第7回西日本部会研究懇談会

『南アメリカにおける土器と神殿の起源』

第7回西日本部会研究懇談会は、平成30年6月30日(土)、名古屋大学文学部棟127号室にて開催された。参加者は13名であった。

当初、「南アメリカにおける土器と神殿の起源」と題した今回の研究懇談会では、エクアドルとペルーで精力的に調査を展開している鹿又喜隆氏(東北大学)と鶴見英成会員(東京大学総合研究博物館)をお招きし、最新の調査成果についてご報告いただく予定であった。しかし、諸般の事情により鶴見会員の発表はキャンセルとなり、急遽、伊藤伸幸会員(名古屋大学)よりメソアメリカにおける最初期の土器や土偶についてご発表いただいた。

発表の一人目は鹿又喜隆氏で、題目は「エクアドル沿岸部の土器出現前後の変化」であった。鹿又氏は、エクアドルのサンタエレナ半島において土器出現前後のラスベガス文化と初期バルディビア文化の比較を通じて、その変化の実態解明に取り組んでいる。発表は、ロシア人研究者との交流から南アメリカ大陸の研究を開始したという鹿又氏の研究履歴をふまえて時系列に報告された。鹿又氏は、次々と既存の説に疑問を投げかけ、石器の使用痕分析結果などを用いながら丁寧に新たな説を提示していった。最後に、石器研究という視点から土器出現の背景に関する独自の仮説について説明した。

鹿又氏の発表のコメンテーターとしては、青山和夫会員（茨城大学）をお招きした。マヤ文明の石器研究の第一人者である青山会員からは、石器分析に関する様々な質問や課題、また新大陸というより大きな枠組みからコメントをいただいた。新大陸を通じて原産地分析による遠距離交易に関する研究は比較的蓄積がある。しかし使用痕分析による石器の技術・機能に関する研究は依然として少ない。この点において鹿又氏の研究の重要性が強調された。また石器研究に終始するのではなく、往時の社会あるいは文化全体を考える姿勢の重要性を説かれた。会場からは、とくに南アメリカを専門とする会員から専門的な質問・コメントがよせられ、土器出現期の様相については、ブラジル、コロンビア、ペルーなどより広域的視点、さらに公共建造物の出現と絡めた議論の重要性などが改めて認識されるにいった。

二人目は伊藤伸幸会員で、題目は「メソアメリカにおける最初の焼き物」であった。伊藤会員には、直前の依頼にかかわらず、発表を快諾いただいたことに深謝申し上げる。発表では、メソアメリカ最初期の土器が出現する地域が複数あり、土器製作が単一地域ではなく、複数地域から独自に発達していったのではないかということを示す資料が提示された。伊藤会員の発表をうけて、その後の質疑応答では、新大陸全体として、なぜ土器製作が始まったのか、またどのように土器の製作技術が伝播・発達していったのかなど、情報交換や議論が展開された。

昨年に引き続き、今回の西日本部会研究懇談会においても非会員からの発表を含めることとした。普段の研究大会では聴講することのできない貴重な研究内容を知る機会を提供する、非会員と会員の新たな交流を促し、学会の活性化を図ること意図して

いる。事実、これまでの日本人研究者の経歴とは明らかに異なる流れで新大陸研究にかかわり、わずか5年ほどで重要な研究成果をあげている鹿又氏から会員たちもさまざまな刺激を受けたに違いない。鹿又氏もまた事実確認も含め新大陸に関して博識な参加者よりさまざまなコメントを頂き、課題が明確になった、と感謝の言葉を残している。

研究懇談会自体は盛り上がったものの、参加者が少ない点は気がかりである。名古屋という立地か、企画内容か、宣伝方法か、色々と工夫が必要と思われるが、会員の方々には積極的な参加をお願いしたい。最後に、急遽、鶴見氏の発表を楽しみにされていた方には心よりお詫び申し上げる。機会を改めて発表いただく方向を模索している。

（西日本部会幹事：市川 彰）



●第8回東日本部会研究懇談会 『2017年度修士論文発表会』

第8回東日本部会研究懇談会は、平成30年3月25日（日）、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階「角会議室」にて開催された。参加者は18名であった。

「2017年度修士論文発表会」と題した今回の研究懇談会では、2017年度に修了された4名の大学院生を迎え、メキシコ、エルサルバドル、コスタリカ、ペルーでの調査研究の成果をご発表いただいた（なお、以下の所属は発表時点のものである）。

発表の一人目は荒木昂大会員（東北大学）で、「メキシコ トラランカレカ遺跡の磨製石器研究—形成期における食物加工具の利用に関する考察—」であった。メタテとマノの分析から、形成期メキシコ中央高原の一大拠点であったトラランカレカの生業、生活復元を視野に入れた研究成果が発表された。

二人目は、久保山和佳会員（早稲田大学）で「コ

スタリカにおけるヒスイ製ディオス・アチャ型ペンダントの研究」であった。中間領域に主に分布するヒスイ製ディオス・アチャ型ペンダントに関して、形態分類、製作技術研究、機能分析という観点から、新たな解釈を提示するという意欲的な研究成果が発表された。

三人目は、深谷岬会員（名古屋大学）で「古典期前期メソアメリカ南部太平洋岸地域におけるテオティワカン様式土器の受容」であった。テオティワカン文化の受容過程について、三脚円筒土器の規格性と装飾様式の分析から明らかにしようとする基礎的な研究成果が発表された。

四人目は、金崎由布子会員（東京大学）で「アンデス文明形成期後期から末期の社会変化とその過程—ペルー北部中央山地ワヌコ盆地の事例を中心として—」であった。土器様式の移行年代、土器生産システムの分析を通じて、ワヌコ盆地における形成期後期から末期の社会変化とその過程について実証的に明らかにしようとする研究成果が発表された。

今回の研究懇談会は、学会として初の試みとなる修士論文発表会という形式で開催した。修士論文とはいうものの、発表者らは長期間にわたりフィールドに赴き、発掘調査や遺物分析を自ら経験・実施したうえで論文を作成しており、いずれもレベルの高い研究発表であった。研究内容のみならず、発表方法やスライドの完成度の高さなども目を見張るものがあり、各発表者の本発表会における意気込みが感じられた。また研究内容の深化を企図して質疑応答の時間をやや多めに確保したが、各質問に的確に答える姿は頼もしい限りであった。参加者からは時には厳しい質問もあったが、参加者の多くが発表者らの研究や資質を評価するがゆえの質問やコメントであり、今後ますます研究の発展が期待される場所である。

修士論文発表会後の懇親会の席においても、議論は尽きず、研究内容にのみならず、フィールドでの体験談や将来の進路についてなど、会話は多様なテーマにおよんだ。古代アメリカ研究の裾野は広がってきているとはいえ、修士・博士と進学する学生はそれほど多くはないのが現状といえよう。そうした中で同年代の同僚の存在は、研究を進めていくうえで何かと心強いものである。本研究懇談会をきっかけとして発表者同士の絆が一層深まることを期待したい。

今回の発表者4名は、国内外の博士課程に進学し、今後も研究を継続されていく。については、この修士論文発表会でのフィードバックをもとに、学会誌への投稿、研究大会での発表など次のステップへと進んでいただければ幸いである。会員の皆様方におかれましては、こうした若い人材の育成のためにも積極的に研究懇談会にご参加いただけますよう、ご理解とご協力をお願いする次第である。

（西日本部会幹事：市川 彰）



●第9回東日本部会研究懇談会

『メキシコ中央部の後古典期：歴史記録の再検討』

第9回西日本部会研究懇談会は、平成30年7月7日（土）、専修大学神田キャンパス5号館4階542教室にて開催された。関西からお招きしていた二人のコメントーターも、西日本を中心に甚大な被害が出た「平成30年7月豪雨」の最中、無事にご参加いただくことができ、会員12名と非会員4名の計16名の参加があった。

今回の研究懇談会は「メキシコ中央部の後古典期：歴史記録の再検討」と題し、メキシコの後古典期から植民地期にかけてつくられた石彫記念碑や絵文書といった歴史記録に関する解釈や研究方法に関する論考が発表された。

一つ目の発表は井関睦会員（明治大学）による「民族史の記録とその意味—アステカの事例を中心に—」であった。報告では、石彫記念碑をアステカ王国の民族史観を反映する記録媒体と捉え、その図像表現や使用方法の分析を通じた民族史記録の意味と機能についての論考が発表された。コメントーターをお願いした大越翼会員（京都外国語大学）からは、最初に論点の整理がおこなわれた。次に、歴史というものは語られる過程で様々に異なる解

積が生まれ、当初の意図から変容していくものであることが指摘された。そしてその通時的变化を考古学的に捉えることが重要であるとのコメントがなされた。

二つ目の発表は在メキシコ研究者の柳澤佐永子氏（元メキシコ国立自治大学美学研究所研究員）で「メソアメリカ先スペイン期絵文書の研究方法の再検討～オアハカ州ミシュテカのウィーン絵文書を中心に～」であった。発表は博士論文としてまとめられた研究の一部であった。発表ではミシュテカ絵文書の先行研究において、美術的価値基準による主観的な評価がなされていることが問題点として指摘され、絵文書に描かれている内容の時間枠と作成年代の議論を分離し、マテリアルとしての絵文書のコーディゴロジーに着目した科学的な分析方法の試論が報告された。コメンテーターをお願いした岡田裕成氏（大阪大学）からは、方法論に関するいくつかの確認がなされ、美術史学に伝統的な様式論や図像学とともに、科学的調査を併用することの重要性が肯定的に評価された。

会場参加者からも多くの質問やコメントの希望があったが、運営の都合上、十分に時間的余裕がとれず反省点であった。研究懇談会は発表者と参加者の意見交換や議論の場として、可能な限りの時間的余裕を持てるよう心がけてきたのだが、反省点であった。しかし、コメンテーターを学会外からお招きしたことで、意見交換がなかなか容易でない近接分野間や、非会員との新たな交流・懇談の場となったと思う。

今回の研究懇談会も海外に研究拠点を置く研究者の帰国に合わせた開催となった。また現在企画中の第10回東日本部会研究懇談会も、海外在住の研究者にご登壇いただく予定で準備を進めている。私が幹事を引き受けて以降、東日本部会では会員・非会員を問わず海外在住研究者に発表いただく機会が続いた。特に意図したわけではなく、手探りで企画を模索する中で、興味深い研究をされている方に声を掛けさせていただいた上の偶然の結果なのだが、顧みると、それだけ海外を拠点とする日本人研究者が増加してきた結果ともいえるのだろう。現在も学生会員を中心に、海外を拠点として選ぶ流れは続いており、在外日本人研究者は今後とも増えていくと思われる。今後ともそうした在外会員には、研究発表の場の一つとして積極的に研究懇談会を有効に活用して欲しいと思う。

2018年11月25日（日）に第10回東日本部会研究懇談会の幹事を務めさせてもらったあと、再び一会員として研究懇談会を応援する立場に戻らせていただく。つたない企画運営にもかかわらず、ご協力いただいた発表者・コメンテーターの方々、会場協力いただいた井上幸孝会員と鶴見英成会員、そして会にご参加いただいた皆さんへこの場を借りてお礼申し上げる。

（東日本部会幹事：福原 弘識）



本学会協力事業の報告

●山形大学・国立民族学博物館学術協定締結記念 「国際学術講演会 : ナスカとモチェ」

山本睦 (山形大学)

2018年2月17日(土)、山形大学人文社会科学部1号館3階301教室において、山形大学・国立民族学博物館学術協定締結記念「国際学術講演会 : ナスカとモチェ」がおこなわれた。

主催は、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A03「アンデス比較文明論」(研究代表者:坂井正人)、科学研究費補助金基盤研究(A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」(研究代表者:関雄二)、および山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所である。また、山形大学と国立民族学博物館が共催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

この国際学術講演会では、先史アンデス文明を代表し、同時期(紀元前後~6世紀頃)に繁栄したナスカ社会とモチェ社会に関する近年の研究成果、およびドローンや航空レーザー測量など最新の研究手法を用いた現地調査についての報告がなされた。

はじめに、ルイス・ハイメ・カスティージョ氏(教皇庁立ペルー・カトリカ大学)が、「旧来の諸問題に対する新たな手法:ヘケテペケ谷のモチェ調査より」というタイトルで講演をおこなった。講演では、現在も調査継続中のサン・ホセ・デ・モーロ遺跡の成果をもとに、フィールドでの情報収集に関する写真測量やドローンといった新たな手法を紹介しながら、古代アンデスに栄えたモチェ社会についての報告がなされた。とくに、サン・ホセ・デ・モーロ遺跡が、当時のヘケテペケ谷の中で最も聖なる場所であり、ヘケテペケ谷全体から集まった人々のために、埋葬や葬送の儀礼がおこなわれていたことが、具体的なデータをもとに論じられた。

次に、坂井正人会員(山形大学)が「ナスカの地上絵と最先端技術:人工衛星・踏査・3Dスキャナー・航空レーザー測量・ドローン」と題して講演をおこなった。そして、ナスカの地上絵の調査においても、人工衛星画像や3Dスキャナー、考古学的踏査といったこれまでの調査方法に加えて、航空レーザー測量やドローンといった新たな技術が導入され、多くの新たな知見がもたらされていることが述べられた。

講演会の参加者は89名と多くの参加者があり、最後には時間が足りなくなるほどの質問がだされ、非常に盛況な会であった。



((C)山形大学ナスカ研究所)

●国立民族学博物館・山形大学学術協定締結記念国際フォーラム「Monumentalidad y Poder en los Andes (アンデスにおけるモニュメンタリティと権力)」

山本睦 (山形大学)

2018年2月19日(月)、国立民族学博物館第4セミナー室において、国際フォーラム「Monumentalidad y Poder en los Andes (アンデスにおけるモニュメンタリティと権力)」が開かれた。科学研究費補助金基盤研究(A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」(研究代表者:関雄二)、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究A03「アンデス比較文明論」(研究代表者:坂井正人)、および山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所が主催し、国立民族学博物館と山形大学が共催、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

本フォーラムでは、古代アンデス文明をめぐる最新の研究成果に関する発表を聴き、それらの議論に関するディスカッションに参加できるということもあって、平日の開催にもかかわらず、当日の参加者は20名であった。

発表者は、発表順にルイス・ハイメ・カスティージョ氏(教皇庁立ペルー・カトリカ大学)、坂井正人会員(山形大学)、関雄二会員(国立民族学博物館)である。また、井口欣也会員(埼玉大学)、大平秀一会員(東海大学)、土井正樹会員(山形大学)、鶴見英成会員(東京大学)、芝田幸一郎会員(法政大学)、

山本睦会員（山形大学）がコメンテーターをつとめた。

本フォーラムでは、古代アンデス文明の形成過程において、社会内部で格差が生じ始める文明初期の様相と、権力者が出現し巨大なモニュメントを利用していった初期国家時代とを対比し、王権や社会格差の発生、とくにモニュメンタリティと権力に焦点をあてて発表および討論がなされた。

まず、カスティージョ氏が、長年調査を続けるサン・ホセ・デ・モーロ遺跡のデータを中心に、ペルー北海岸に栄えたモチェ社会におけるモニュメンタリティの特性について発表した。次に、坂井会員が、ペルー南海岸ナスカ地域での調査をもとに、モニュメントとしての地上絵・神殿・景観のネットワーク化とその変遷について発表した。そのあとで、関会員は、ペルー北部山地のパコパンパ遺跡での発掘データを用いながら、神殿の建設とそこでおこなわれた儀礼の分析を通じて、モニュメンタリティと社会的記憶について論じた。

そして最後に、発表者とコメンテーター、参加者全員で、モニュメンタリティと権力について、個別の事例だけでなく、その定義にも関する包括的な討論が1時間以上も繰り広げられ、盛況のうちにフォーラムは終了した。



((C)山形大学ナスカ研究所)

●国際学術講演会「インカ帝国と石造建築物：チョケキラオ遺跡とエスピリトゥ・パンパ遺跡」

瀧上舞（山形大学）

2018年3月8日に山形大学人文社会科学部1号館において、国際学術講演会「インカ帝国と石造建築物：チョケキラオ遺跡とエスピリトゥ・パンパ遺跡」が開催された。本講演会は、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画

研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、および山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所の主催により、また古代アメリカ学会の協力により開催された。

1人目の登壇者は、パトリス・ルコック氏（パリ第一大学）で、チョケキラオ遺跡における発掘調査について報告された。ルコック氏は2004年から2006年にかけて遺跡の調査を行い、その機能や時代変遷、遺跡を利用した民族集団などを明らかにした。また、遺跡の立地や建築物の配置と周辺の神聖な山との関連性や、壁面のモチーフと織物の図像表現との類似性を指摘し、チョケキラオ遺跡がインカの世界観や暦を体現している重要な祭祀施設であったとする解釈を示した。ルコック氏の講演には山本睦会員（山形大学）による逐次通訳と、松本雄一会員（山形大学）によるスライドの一部和訳が添えられ、参加者に向けてわかりやすく伝える工夫がなされていた。

続いて2番目の登壇者は坂井正人会員（山形大学）で、2005年から2006年にかけて行ったエスクリトゥ・パンパ遺跡の調査について紹介された。坂井会員は、マチュピチュやクスコでの天体観測の事例を示し、インカがビルカバンパへの遷都に際してエスクリトゥ・パンパを選んだ背景として、クスコからの遺跡の方角と冬至の日の太陽の位置との関連性を指摘した。さらに、遺跡周辺の神聖な山との立地関係の重要性についても言及した。また測量図の3次元画像を動画で示すなど、調査成果を最新の研究方法を用いて提示した。

約70名の山形市民および山形大学関係者が会場を訪れ、講師らの話に興味深く耳を傾けていた。講演後は質疑応答の時間が設けられ、発表を聞いた市民の方々から複数の質問が挙がるなど、盛況であった。



((C)山形大学ナスカ研究所)

●国際シンポジウム「アンデスにおける人の移動ルートと交流(Rutas e interacciones humanas en los Andes)」

佐藤吉文 (神戸市外国語大学)

2018年3月6日(火)、キャンパスイノベーションセンター東京(品川区、田町)多目的室1において『アンデスにおける人の移動ルートと交流(Rutas e interacciones humanas en los Andes)』と題された国際シンポジウムが開催された。これは、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」(研究代表者:坂井正人)および、山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所が主催し、古代アメリカ学会の協力で実施されたものである。

フランスからパトリス・ルコック氏(パリ第一大学)、ホルヘ・オラノ氏(パリ第一大学大学院)を招聘し、日本からは坂井正人会員、山本睦会員(いずれも山形大学)の二名を交えて「人の移動」という観点からアンデスの社会と文化について議論が交わされた。「人の往来なくして生が営まれる場はありえない」という英国の人類学者ティム・インゴルドの言を踏まえるならば(インゴルド『ラインズ線の文化史』2014)、生の営まれる場を結びつける「ルート」を誰が、いつ、どのように移動したかという問題は、先スペイン期から現代にいたるまでのアンデスの人びとの生を理解するうえで是非とも検討されるべき案件である。本シンポジウムではそれぞれの研究者が、この問題を形成期ペルー北部(山本)、前期中間期ペルー南海岸のナスカ(坂井、オラノ)、現代ボリビアの牧民(ルコック)を具体的事例として多様な観点から検討して論じた。

シンポジウムではまず坂井会員が、近年山形大学によって精力的に進められているナスカ・プロジェクトの成果を踏まえて、形成期末期から後期中間期に至るナスカ台地を挟んだ二本の河谷間移動とそこで実践された行為について通時的に論じた。地上絵で知られるナスカ台地の南北には二本の河川(北:インヘニオ川、南:ナスカ川)沿いにいくつかの大規模遺跡が存在するが、それらの関係については不明な点が多い。そこで坂井会員は台地上に描かれた地上絵の高精度記録と台地内の緻密な踏査をもとに、台地上に製作された地上絵に沿って儀礼的な土器の破碎が行われたことを明らかにしたうえで、その行為の連続として二つの地域をつなぐ複

数のルートを時代ごとに浮き上がらせて、その変化を指摘した。

続いて、同じくナスカ・プロジェクトに参加しているオラノ氏がグランデ川沿いの大規模遺跡ベンティヤー遺跡に関する測量調査、遺跡内表面採集調査、試掘を踏まえて、ナスカ期の地域統合プロセスについて自身の仮説を披露した。ナスカ期のナスカ地方にはいくつもの河川沿いに複数の集落が形成されたが、やがて大祭祀センターであるカワチのもとに統合されたとされる。しかし、その統合がいつ、どのようなプロセスで達成されたかについては具体的な資料に乏しい。この問題をオラノ氏はベンティヤー遺跡での調査から検討したのである。それによれば、本来、大規模な住居性集落と考えられてきたベンティヤーでは、近年の、他遺跡の住居址発掘で明らかになっている住居性をあまり確認できず、むしろ居住空間とは認めがたい大規模な矩形空間がかなり存在するという。そして、建造物の建築技法には当初の石造からカワチでしか確認されていないアドベ製への変化が認められ、この時期にカワチからの影響が見受けられると指摘する。ただし、遺跡内の建築が全て同時期に用いられたわけではなく、その規模には時期的な変動もあるという。氏の、同遺跡の性格そのものをより祭祀性の高いものとして再考すべきであるという指摘は、ナスカ社会の統合プロセスを考えるうえで極めて重要である。

山本会員は、これまでの形成期アンデスにおける従来の地域間交流に対するイメージを、ローカルな資料に依拠することによって、再構築しようと試みる。等位政体相互交流論にしる世界システム論にしる、チャビン・デ・ワントルをはじめとする大センターを中心として半ば一枚岩的に論じられてきた従来の地域間交流論において、周辺的な社会の実像は、その網の目に掬われずに埋没する傾向にあった。モデル化によって各地で生じたはずのダイナミックな人の動きは失われ、その実像を非歴史的にしてしまう。氏はその問題を自身が従事してきた中央アンデスと北部アンデスの境界領域の調査から検討し、当該地域における具体的な生の営みの背後にある社会的意味を地域間交流との関係で論じた。建築や土器その他の出土遺物の分析とGISによるルート推定に拠りながら、発表では、当初北部アンデスとの間に文化的つながりを見せた北部ペルーのポマワカ地方の人びとが、次第に中央アンデスとの結びつきを密にし、政治経済的資源として南からの文

化を採用しながら河川内の統合を進めたあと、最終的に独自の神殿建築を発展させて地域アイデンティティを主張する状況が示された。

以上の三名が先スペイン期の人の移動を主題としたのに対し、ルコック氏は、現代ボリビアの牧民に密着した民族学的調査について披瀝し、そこから先スペイン期の人の移動が残しうる考古学的痕跡とその解釈についてモデルを提示した。1980年代までボリビア西部のウユニ塩湖周辺には農耕と牧畜を営む傍で、塩湖で採取される塩を運搬して物々交換経済を営む牧民が存在した。自身でその生活に密着して収集した調査成果は、近代化によりすでに失われてしまったアンデスの人びとの暮らしについての貴重な資料である。その内容についてはすでに詳しく論じた氏の手による数々の成果があるが、氏は今回、そこにチリ極北部やアルゼンチン北西部からの最新の考古学研究の成果を書き込むことで、アンデス山脈をまたいでチリ太平洋岸からアンデス山脈東斜面にいたると同時に、アルティプラノを通じて南北にも広がる移動の全体像を復元してみた。

そのうえで、最後に氏は考古学者に対してある種の警鐘を鳴らす。ウユニ塩湖周辺ではティワナク期から後期中間期に割りあてられる様々な様式に属する土器資料が発見されている。垂直統御論を念頭に置けば、この事実は、考古学者をして複数の民族集団による塩資源の共有活用という像を思い浮かべさせる。しかし、80年代のウユニの牧民たちはケチュアやアイマラ、トゥピ＝グアラニなど複数の民族集団にまたがって交換関係を築き、しかもその交換によって民族集団を超えて物質文化を共有していた。この事実は、先スペイン期の地域間交流と物質文化、民族集団を直接的に結びつけがちな考古学徒にとって批判的示唆に富むものであろう。



((C)山形大学ナスカ研究所)

●座談会「キャリアパスとライフイベント」

中川渚（総合研究大学院大学）

瀧上舞（山形大学）

2018年4月21日（土）、東銀座のレンタルスペース会議室で、古代アメリカ学会主催の座談会「キャリアパスとライフイベント」が開催された。遠方から足を運んでくださった方もおり、女性10名、男性1名がご参加くださった。参加者は全員古代アメリカ学会の会員であった。本座談会は、古代アメリカ学会の女性会員数が増加傾向にある上、近年は積極的に家事や育児に参加する男性も多く、ライフイベントと研究とのバランスが、男女を問わず重要なテーマとなってきたことを鑑みて開催した。他学会では分科会やシンポジウムなどの形でこのようなテーマを扱うケースが多いが、メインテーマの扱いで学会が主催するというのは、画期的な試みだったと思う。今回座談会形式としたのは、参加者全てが等しい立場で、意見や質問、考えや経験が多方向的に投げかけられることを期待してのことである。また、個人の家庭状況や体験談を話すという少しセンシティブなテーマに触れるため、参加者にはリラックスした状態で臨んでほしいとの思いもあった。様々なライフイベントの段階にいる幅広い参加者を募るため、子ども同伴での参加も望ましく、そのため大学や研究所の会議室という用途の限られた会場ではなく、多目的用途を受け入れている貸会議室を選定した。

座談会でははじめに自己紹介をしていただき、各自の関心のある事柄などを挙げてもらった。若手研究者からは、これからどのようなライフイベントの問題に直面するのか、どうやって海外と日本での仕事を両立させれば良いのか、どこを選べば研究と家庭を両立できるのか、それらを考えるための情報として、先輩方の経験や体験を聞きたいという率直な意見が出された。それらの意見に対して、様々なライフイベントの段階にある先輩研究者たちが、それぞれの実体験をお話くださった。2時間半にわたる意見交換は非常に盛り上がり、座談会終了後にファミリーレストランで開かれた懇親会にも多くの方が参加し、活発なやり取りが続けられた。なお、内容の詳細については、瀧上の詳報をご参照いただきたい。

初めての試みということもあり、座談会の最後に、参加者全員にアンケートにご記入いただいた。アン

ケートは、「どのような人が、どのような関心を持って来たのか、座談会開催の意義はあったか」を知る目的で作成した。質問は、現在の所属、来場のきっかけ、テーマ、構成・内容、時間配分、開催時期・日程、会場の場所に関するそれぞれの満足度、そして同イベントが開催された際にまた来たいと思うかどうかを項目とし、最後に感想や意見を自由に書ける欄を設けた。

まず、参加者の現在の所属は、博士課程、無給・有給の研究者、大学の非常勤講師、育児中で休職中の方という構成であり、今後の研究活動とライフイベントを模索している時期にあたる方々が特に関心を持って参加して下さったことがわかった。来場のきっかけは学会メーリングリストが7人と多く、次いで友人・知人が4人であった。

次に座談会の満足度に関しては、現在の所属にかかわらず項目全体に満足と答えた方が多かった。具体的には、テーマに関しては、「満足」が10人、「普通」が1人、構成・内容は「満足」が9人、「やや満足」が1人、「普通」が1人であった。時間配分に関しては「満足」が6人、「やや満足」が3人、「普通」が1人、「やや不満」が1人と、満足度がやや下がる傾向が見られた。ただし「やや満足」「やや不満」と回答した方の自由記述欄には、「時間が足りなかった。もっと時間がほしかった」との記述があったため、座談会が盛況だったことを裏付けているともいえる。

開催の時期・日程に関しては、「満足」が10人、「普通」が1人であり、年度初めではあったものの、日程はある程度適切だったと考えられる。会場の場所は、「満足」が8人、「やや満足」が1人、「普通」が2人であり、利便性等を考慮して東京を選択したものの、遠方から足をお運びいただいた方もおり、1会場で集まることの限界は否めない。事前に「参加したい」「興味がある」との連絡があったものの、居住地が東京から離れているために当日欠席となった方もいらっしゃったため、今後はskypeでの参加等も含めて検討していきたい。

最後に、「同イベントが開催されたら」の回答に関しては10人が「また来たい」、1人が「近所で開催されれば来たい」との回答であり、座談会開催が有意義で、好ましく捉えられていることがわかった。

その他自由意見欄で顕著だったのが、男性の話も聞きたいという意見だった。今回は趣旨文によって女性向けであるかのような誤解を招いたかもしれ

ず、男性参加者が1名と極端に少なかったが、次回開催の折には、ぜひ男性にも参加していただきたいと思う。また、「指導教官の立場にある方のお話も伺いたい」という意見も頂戴した。様々な状況・立場の方々に参加していただければ、より充実した会になることと思う。

進行役が不慣れなこともあり、話が分散してしまう部分もあったが、以上のアンケート結果を見ると、座談会はおおむね好評だったと捉えてよいだろう。今回はライフイベントの中でも「結婚・出産」に話が集中したが、「どのような研究の続け方があるか」などのテーマに絞った形での開催も検討していきたい。次回開催は未定ではあるが、幅広い層の方々にご参加いただければ幸甚である。



●日本アンデス調査 60 周年記念シンポジウム「日本アンデス調査団と山形大学ナスカ・プロジェクト」
荒田恵（国立民族学博物館外来研究員、
関西大学非常勤講師）

2018年6月23日（土）に山形大学において、日本アンデス調査 60 周年記念シンポジウム「日本アンデス調査団と山形大学ナスカ・プロジェクト」が山形大学主催、国立民族学博物館による共催で、古代アメリカ学会などの協力を得て開催された。当日の参加人数は113人で、参加者の関心の高さを反映するかのよう、会場は終始熱気に包まれていた。

はじめに、井口欣也会員（埼玉大学）からシンポジウムの開催趣旨が述べられ、1958年以降、調査団によって行われてきた調査が紹介され、近年の若手研究者の研究動向が報告された。

続いて、大貫良夫会員（野外民族博物館リトルワールド館長・東京大学名誉教授）が発表し、アンデス調査を始めた詳しい経緯や調査初期の様子が語

られ、将来的には広く人文科学研究としてアンデス研究を行う必要性が説かれた。

関雄二会員（国立民族学博物館）は、調査団が形成期研究を行うに至った経緯や神殿更新について説明し、形成期研究を深めるために権力論へとシフトした結果、形成期における権力生成は一様でなくさまざまであったことが明らかになったと発表した。

そして、山形大学の坂井正人会員、山本睦会員、松本剛会員による発表では、2004年以降行われている学際的なナスカ・プロジェクトの調査成果の報告が行われた。ナスカ研究所に在中している山本会員と松本会員はスカイプで発表に参加し、作成したビデオで研究所の紹介とそこで行われている大学院研究について説明し、坂井会員からは将来的に研究所が教育拠点としても展開していくことが付け加えられた。

3本のナスカ・プロジェクトの調査研究成果報告1本目となる松本雄一会員（山形大学）による発表では、インヘニオ河谷とグランデ河谷の遺跡分布調査で得られた成果が報告された後、地方におけるワリ支配と在地側の反応を、ワリ周縁地域であるナスカから考察していく重要性について述べられた。

2本目の瀧上舞会員（山形大学）の発表では、ミイラの毛髪と同位体分析に基づく、ナスカ南部地域におけるナスカ期からイカ期までの食性について報告され、イカ期における環境の湿潤化が農耕の拡大やラクダ科動物の飼育の増加を促した結果、トウモロコシや海産資源の利用が増加した可能性が指摘された。

3本目の坂井正人会員による発表では、“面”の地上絵はナスカ台地を横断する道標のような役割をナスカ早期に果たしていたことなど、地上絵をめぐる最新の研究成果が報告された。

その後、フロアからナスカ研究を行うに至った研究動機や神殿更新についての質問が寄せられ、それぞれ坂井会員と関会員から回答が行われた。

最後に、土井正樹会員（山形大学）が、山形大学が重点的に取り組んでいる語学教育と、ペルー、ボリビアおよびチリへの短期派遣プログラムの具体的な内容について紹介し、青山和夫会員（茨城大学）によるナスカ・プロジェクトへのコメント、加藤泰建会員（埼玉大学名誉教授）による総括コメントで

シンポジウムが締めくくられた。



事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

2019年も学会主催の「研究懇談会」(東日本部会、西日本部会)を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

2. 第22回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第23回研究大会・総会を2018年12月1日(土)、2日(日)に専修大学生田キャンパス(神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1)において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第22号(2019年12月発行予定)に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集しています。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、最新の寄稿規定および執筆細目(ウェブサイト掲載)をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります(2019年3月31日提出締め切り)。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2019年5月20日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読(原稿受領後1~2か月程度で終了予定)の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先:

杓谷茂樹(運営委員、会誌編集担当)

〒923-0921 石川県小松市土居原町10-10

公立小松大学国際文化交流学部国際文化交流学科

Tel. [REDACTED] (ダイヤルイン)

Fax. [REDACTED]

E-mail: aant.edit@gmail.com

②会報「44号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力をお願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。

会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字(会報2ページ分)以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員(会報)小林貴徳宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス [REDACTED]

(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 2019年5月17日(金)

○発行予定 2019年6月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812
加入者名：古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店
口座番号：1211948(普)
口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000円(会員価格)で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

(事務局からのお願い)

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特にGmailなどのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

<編集後記>

予定より遅くなりましたが、どうにか発行にこぎつけることができました。今号には3名の会員から素晴らしい原稿をお寄せいただきました。寄稿者の皆様に感謝を捧げたいと思います。

私は今号をもって会報編集担当を引退させていただきます。試行錯誤の6年間であり、苦労もありましたが、私にとって良い学びの場所でもありました。今後は一会員として、会報を楽しみたいと思います。6年間お付き合いいただきありがとうございました。(福原)

年2回から年1回へ、紙媒体からWEBでの公開へ、会報発行の形式にいくつかの変化を迎えています。とはいえ、これまでどおり充実した内容を読者の方々に届けるという会報編集の理念は変わりません。

そうした理念を追求して6年のあいだ力を尽くしてくださった福原さんが本号をもって編集の場から退かれます。これまで読者を想定して工夫を凝らした構成を提案されてきました。会報の発展におおきく貢献された福原さんに感謝申し上げます。(小林)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2018年10月31日
編集 古代アメリカ学会 会報担当：小林 貴徳
福原 弘識

古代アメリカ学会事務局
〒990-8560
山形県山形市小白川町1-4-12
山形大学人文社会科学部
E-mail: jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180-1-358812
ウェブサイト URL http://jssaa.rwx.jp/